

「税関」再読

保坂, 嘉恵美

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

77

(開始ページ / Start Page)

15

(終了ページ / End Page)

31

(発行年 / Year)

1991-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004690>

「税 関」 再 読

保 坂 嘉 恵 美

1849年6月、前年の大統領選挙で政権が民主党からホイッグ党に交代した余波をうけて、Hawthorne はそれまで3年あまり奉職していたセイレム税関(The Salem Custom House)を追われる。新大統領 Zachary Taylor は、政権交代にともなって公職が入れ代わるという当時の行政慣行、いわゆる“spoils system”を適用しない旨予め声明を出していたにもかかわらず、Hawthorne の場合はその声明に裏切られたかたちになった。罷免の可能性がみえはじめた頃から、当人自身も積極的な弁明を行ない、以前の自分の任官がホイッグ党員に取って代わったものではないこと、そもそも任官がなかったのは、「あわれなほどつつましい作家としての業績以外に何をもって願ひ出たからではない、(民主党員としての)政治活動の報酬などではなかった」¹⁾という訴えもあったが、結局6月7日彼は検査官(Surveyor)の職を辞任した。しかし罷免からおよそ3か月を過ぎてやっと9月、後任の人事が、議会上院で承認されるまで、Hawthorne の在職中の不正を捏造し追放を画策した地元ホイッグ党の有力者の一派と、片や彼を擁護留任させようとする別の一派および友人たちが、ジャーナリズムで非難の応酬をくり返し、6月21日付の妻 Sophia の手紙によれば、「世論は『反旗を翻し』、夫の名は『国中に鳴りわたって』」²⁾、作家としての名声に先んじて、かれはセンセーショナルな時の人となったのである。

こうして不本意ながら公職をはなれた Hawthorne は、翌月末には母を失うという不幸にも見舞われながら、9月頃から自宅に引きこもり、執筆活動に集中しての半年足らずのうちに最初の長編『緋文字』(*The Scarlet Letter*)を書き上げるのである。1850年3月16日初版2千5百部、おおむね好意的な書評が幸いして4月に再版2千5百部、9月にはさらに1千部が増刷され、彼は一躍有名になってこれまでくすぶり続けていた作家としての名声欲がここに至って初めて充たされた。ただ、この好調な売れ行きが、税関辞職騒動で一挙に高

まったいわば政変の犠牲者としての彼の知名度によるところが大きかったとは、パブリシティの皮肉な顛末といえよう⁸⁾。

『緋文字』の序文「税関」(“The Custom House”)は、通例序文というタイトルによって想起されるような、小説本編の理解にプラグマティックに貢献する補足的な付加物ではない。なるほどその中核には、税関二階の屋根裏部屋で「私」が煤けた古文書のなかにAをかたどった赤いぼろきれを発見するというドラマが仕込まれており、小説本編の「起源」に歴史的な信憑性を付与しようとする文学的慣習が踏襲されている。しかし、この虚構化された「原体験」を核として3年あまりの税関勤務にまつわる自伝的な回想録という体裁をとるこのテキストの、語りのレベルに関心を移すと、年代記述の一貫した欠落、それに代わって、決定論へのアンビヴァレントな偏向、現在から系譜学的な過去への執拗な遡及、同僚官吏に対する暴力的なまでの風刺と片や自虐的なまでの自己言及の交錯、いくつもの儀式的な自己劇化の配置等々、いわば内面化の徹底がきわだってみえてくる。この時ひとは、事実的な「体験」の再現とは次元を異にするある心理的な「物語」が揺曳していることに気づくのであるが、そのような視座からの再読こそが、これまでもっぱら伝記的な還元あるいは「ロマンス」理論の回収のために部分的な解体にみまわれてきた「税関」のテキスト全編を、まさに「緋文字」発見を支柱とする隠喩の構築物として復元する契機とならねばならない。本論はそうしたひとつの試みである。

※

故郷セイレムでの官吏生活に先立つ3年間、Hawthorneはコンコードの「旧い牧師館」(Old Manse)でSophiaとの幸福な新婚生活を過ごした。EmersonやThoreauといった多くの文人たちと刺激的な交流をもち創作活動も充実した時期であったが、長女の誕生後二人目のこどもの出産を控えて「(雑誌に短篇を書く)世の中でいちばんもうからない商売」⁹⁾では早晚逼迫する家計を維持できず、1845年の夏から有力な政治人脈をたよって故郷のセイレム税関への就職要請が、民主党大統領James K. Polkに対して活発になされた。そうした人脈の一人で親友のHoratio Bridgeに宛てた手紙に「この数カ月の経験で私はかなりの政治家に成長しました」¹⁰⁾ともらすような活動が効を奏して、1846年4月、4年の任期で検査官に任官した。

※

過去のある時から起こされる「私」の物語を始める前に、語り手は予め読者

を舞台になじませようとするためか、しばらく案内役となって税関の外から内へと観覧する。半世紀前には殷賑をきわめた貿易港の、今は昔の面影もなくさびびはてた波止場からそれを見おろすように立っている大きな煉瓦づくりの建物へと歩みを進め、とりわけ入り口では、屋根に巨大な翼をひろげ、胸には盾と矢を構えて猛々しく舞っているアメリカ鷲の像に注意を促す。だがどうやら彼の本当のねらいは、この合衆国の守護鳥を「遅かれ早かれ爪をたてて、嘴でひとつき、そのやじりのついた矢で深い痛手を負わせて、(胸の綿毛に庇護を求めた) 雛たちを放り投げてしまう癖がある」⁽¹⁾などと、皮肉の一矢を報いる標的にすることにあるようだ。人間模様に目を転ずれば、たまさか外国船の出入港時には、船主や船長や船員そして商人といった雑多な人間たちの往来で、昔の喧騒をとりもどすことがあるとはいえ、税関の恒常的な風景は、港の沈滞ぶりとなれあうかのようにして生きつづけてきた老官吏たち——「旧式な椅子に並んで坐り、椅子の後脚をかしげて壁にもたれ、よく眠りこけているが、時どきことばとも駢ともつかない声でしゃべりあっている」——の群像ばかり。そしてこの案内のしめくくり、彼がもはやその風景に属さぬものであることを、語り手は読者にこう断っている「今は、かのロコ-フォコ派の検査官に面会を申し出られてもせんないこと。改革の箒が彼を掃きだし、いっそうふさわしい後任が彼の威を纏って彼の俸給を懐にしているのである。」⁽⁸⁾ ロコ-フォコ (Loco-foco) とは、ホイッグ党员によってつけられた民主党急進派に対する嘲笑的なあだ名であるが、もちろん「ロコ-フォコ派の検査官」なる自称は、先に紹介したような事実経過で世間に流通してしまった時事的な「ホーソン」イメージによりそってみせる、語り手の自己戯画的なポーズにすぎない。

※

「ある朝、私は大統領からの辞令を懐にして、その若岡岩の階段をのぼっていき、税関の主任行政官として、私の重責を補佐してくれる紳士たちの一団に紹介された。」⁽¹¹⁾——この新検査官の初登庁のくだりを「物語」のクロノロジカルな起点とすれば、このはじまりには、先に紹介したような、任官が成るまでの「政治的」な活動の経緯はまったく報告されていない。いわば、就職活動の根まわしに何ら言及はなく、代わりに語り手は、セイレムの帰還を故郷との根深い宿縁のようなものへと還元している。

実際その外観に関するかぎりは、(建築美や画趣や古風さといったものは

ほとんどないのが) わが生まれ故郷の町の特徴であってみれば、駒を散らかしたチェス盤にでも愛着を感じるといったほうがまだしも理不尽ではないだろう。しかし、ほかの場所にいるほうがきまってこの上なく幸福であるとはいへ、私の内には、ほかにより言葉がないので、愛着 (affection) と呼ぶことで満足するほかない、古いセイレムに対するある感情が存在しているのである(10)。

.....

古い牧師館から現れ出るや、どこか他の場所へ行ってもよかった、いや、行ったほうがよかったかもしれないのに、私が合衆国政府の煉瓦づくりの建物に職を求めたのも主として生れ故郷の町に対するこの不思議な、惰性的な、楽しさに欠けた愛着 (this strange, indolent, unjoyous attachment) のせいだった。私は、運命 (doom) に支配されていたのだ。町を出たことは、一度や二度ではなかった——その度に永久にと思えたのだが——結局、粗悪な半ペニー銅貨のように、まるでセイレムが私にとって逃れることのできない宇宙の中心 (the inevitable centre of the universe) であるかのように、舞い戻ってしまうのだ(11)。

そしてこうした土地との心理的なきずなが誘発するアンビヴァレンスは、語り手がその視座を地勢から系譜へと移しかえ、歴史に名をとどめる清教徒の父祖たちの亡霊を召喚するとき、さらにはっきりと増幅されて聞きとれる。

この厳格な、顎髭をはやした、黒いマントととんがり帽子のわが祖先——その昔聖書と剣をたずさえて、まだ荒野に開かれたばかりの通りを威風堂々と闊歩し、戦いと平和の士として大立者であった——それにひきかえ、その名も滅多に聞かれることはなく、顔もほとんど知られていない私であるから、そんな私自身にゆえあるよりは、この祖先ゆえに私はここに住むいっそう確かな権利をもっているように思われるのである(9)。

もちろん語り手は、彼らが善行よりも「迫害精神」 (the persecuting spirit) によって——たとえばクエーカー教徒を厳しく懲らしめ、魔女を裁いた Hathorne たちのように——その系譜に呪咀すべき恥辱をぬりこめた罪びとであることを閑却してはいない。だがそのいちいちの罪状を披瀝し罪の呪いを

払おうとして祈りさえする語りには、父祖たちの不寛容な宗教性に対する、断固とした断罪や批判が発散されているわけではない。むしろ注目すべきは、つぎのような亡霊とのダイアログに聞きとれる自虐性の蔓延ぶりである。

「一体彼は何者だ？」と、灰色の亡霊の一人が別の一人にむかってつぶやく。「物語の作家だと！ 一体全体それはどういう商売かね——どんなやり方で神を讃え、おのれの時代と世代の人類にどんな奉仕をするのかね。まったくもって、こんな自堕落な奴は、ヴァイオリンひきにでもなったほうがまだましというもんじゃ！」こんなぐあいには時の深淵を越えて、私と祖先の間で挨拶が交わされる。

従来父祖の亡霊を召喚するこの一連の場面の解釈には、語りの修辞性は見過ごされ、もっぱら一族の過去の罪に対して語り手が贖いの告白をもらしているとする伝記的還元が支配的であった。しかし、David Stouck が批判するように、「語り手が単にそのような意識によってのみ動機づけられているとみることには、彼の説明をとりまく多くの微妙なあてこすり (subtle innuendos) を無視してしまうことになり、」⁷⁾ そのテクスチュアリティに負荷された含意を回収することはできない。

この場面を読み解くために、まず、亡霊たちとの対面の場面に蔓延する自虐性の正体は何かと問うてみることにしよう。Freud は『トーテムとタブー』で、原父殺害の儀礼的再演が父からの権力の篡奪を祝うものであると同時に父権の抑圧力を増進させてしまう危険をはらんでいるというパラドクスを指摘したが、Eric Sandquist は、“author” が語源的に「増殖」の意味と近親であるとする Edward Said の示唆を受けて、「書くこと」(authorship) の行為遂行的なレベルで達成される「権威」(authority) もまたこのパラドクスから自由ではないことを洞察している⁸⁾。ここで儀式化された父祖たちの登場とそれにつづくダイアログが、父権の委譲をめぐる、語り手を亡霊たちの召喚を主催する者から彼らに嘲笑される者へと貶めてゆく時、まさに語り手はこのパラドクスの再演に立ちあっているといえないだろうか。我々のコンテキストに則して換言するなら、このサイコドラマから発散される自虐性とは、アイデンティティの根拠を系譜のうえでは圧倒的な父権に連なる末裔であるという自負にみいだしながら、しかし、それだからこそ今の自分はその正統な継承権

をよく証明するものではないという不信によって覆される、自負が自己不信を不可避にはらんでゆくパラドクスに由来するものであると、了解できるのではないだろうか。

そして、父権の委譲が、あくまでも語り手の物語作家としての自己実現を評定したうえで宙吊りにされているのであってみれば、ここから先の展開に引き継がれるべき読み手の興味は、官吏への転身によって、この「作家であること」と「権威をもつこと」の語り手にとっての二重拘束的ジレンマが、強力な父権の記憶に抗して税関の内なる舞台でどのように演出されていくのかというシナリオのレベルへ向かってゆかねばならない。「彼ら亡霊たちがどれほど私を嘲り笑おうとも、彼らの強い特質は私の性質にもすっかりあざなわれている」(10)——この場面の最後にもらされる語り手のモノローグを、読者にそのような視座を指示せんとする暗示ともうけとめることにして。

「合衆国の公僕のかなかで、これほどの古老の強者の一団 (a patriarchal body of veterans) を部下にした者は、軍人武官を問わず、私の他におそらくいなかろう」(11)と思わせるほどの老官吏ばかりしかいないことを知った新任の検査官が、着任早々目撃するのは、彼らの恐怖心を露にした対応ぶりである。私への挨拶の折、「(かつてほとんどが船長であった彼らの) 半世紀もの間嵐にさらされ皺の刻まれた頬が蒼白になり、……その昔拡声器でわめきちらし北の風神ポレアスさえも脅しつけておとなしくさせたほどのしわがれ声が震えていた」(12)そのパニックぶりから察するに、大部分がホイッグ党員である彼らは、まるで「その白髪頭をひとつ残らずギロチンの斧にかける……皆殺しの天使」(12)が降臨でもしてくるかのようになり、新しく上司となる民主党員に警戒心を抱いてしていたらしい。この首切り斧「ギロチン」は、脅迫的な革命性を喚起するそのイメージの潜在力によって、語り手がこれから叙述していく官吏たちの、いわば旧体制にあまりにも長く浴しすぎたために発症している一様の退嬰ぶりを照らし出す。その一方で、「政治屋でなかった」からこそ初対面の彼らに斬首刑を容赦してやった「私」であるのに、物語の結末に至っては語り手自身が党派性を根拠に「首を落とされた検査官」(Decapitated Surveyor)(13)となってしまう顛末——隠喩の皮肉な転移は早くもこの時点で準備されているといわねばならない。

語り手が「税関の肖像画を並べた私のギャラリー」(16)と称する人物展覧の場面に選びだした最初の官吏は、齢80歳の「終身検査官」(a certain permanent

Inspector)である。彼は、ほとんど誰の記憶にもない大昔に、独立戦争の陸軍大佐でセイレム港の徴税官でもあった父親が息子のために設けたこの役職に任命され、以来3人の妻と20人の子供よりも生きながらえ安閑として今日に至っている。彼が「本能」の権化であり、精神性にきわめて乏しい「稀にみる完璧な動物性」⁽¹⁴⁾の見本であることを、その偏執的な食道楽 (gourmandism) の生態に戯画化する一節をみよう。

彼が彼の四つの足の兄弟よりもはるかに勝れていた一つの点は、それを食べるということが彼の人生の少なからぬ部分をしめていた、おいしい晩餐のことを覚えている能力であった。……昔の食事の亡霊が、絶え間なく彼の眼前に浮かびあがってくる様子を観察するのは、驚くべきことだった。それらの亡霊は、怒りや報復のためではなく、あたかも彼の昔の舌鼓に感謝してでもいるかのようで、実体はないのに食欲をそそる、果てしもない享楽を再現しようとしているかのようだった^{(15)~(16)}。

こうした戯画的な筆致がいくばくかやわらぐとはいえ、次に紹介される老収税官 (the Collector) ミラー将軍にも、独立戦争の古戦場タイコンデロガ (Ticonderoga) の廃墟にイメージ化されるような精神の風化が暗示されている。齢70歳の彼は、その肩書きの示すように、1812年の対英戦争で武勲を挙げ西部領域の統治者を退いて後、20年前から「歴代の政権の賢明なる寛大さのおかげで、彼自身は安全な地位にいられた」⁽¹⁸⁾ 税関最古参の一人である。語り手は、この「人間の廃墟」⁽¹⁸⁾ の内に、かつて英雄であった彼の堅牢・勇猛・不屈なる精神の痕跡をみいだしながらも、今は、税関の日常から記憶への撤退を余儀なくされている姿を次のように描きだす。

ほんの数ヤードのところから見ているのに、彼は我々の速くにいるように思えたし、椅子のすぐ傍を通過しても、ずっと離れているようで、自分たちの手をのばせば彼の手に触れたかもしれないが、到達しがたい人ともうつつ。彼はもしかしたら、収税官の執務室などという不似合いな環境のなかでよりも、自分の想いのなかでいっそう現実的な生を生きていたのかもしれない。観兵式の展開、戦場の喧騒、30年も前に聞いた勇ましい華やかなファンファーレ——そんな場面や音が、たぶん、彼の知的な感覚の前で

生きていたのだ(18)。

語り手にとって過去は現在の自己実現を揺さぶる強迫性をそなえていた。しかるにこれら二人の老人の記憶とは、本能あるいはいにしへの栄誉といったそれぞれの脆弱な生の根拠を、楽しませあるいは安らがせるノスタルジーにすぎない。

さて、語り手が最後に登場させるのは、前の二人とは対照的な実務家としての「有能さ」を面目とする人物である。子供の頃からこの税関で成長し「税関こそが彼固有の活動領域」(19)で、「あらゆる紛糾を見抜く目と、あたかも魔法使いの杖の一振りのように、それをたちどころに雲散霧消させてしまう整理能力」をそなえた下級官吏。だが、想像力に関わる語り手の才能は、「不可能なものを、指でちょっと触れただけで、白日のように明快なものに変えてしまう」ような合理性・効率性で計られるこの実務能力の権化に対して、異質であるが故に魅せられるはするものの、彼の職業倫理の本質は、次のような風刺的な筆致のなかに看破されているといえよう。

執務にあたって、正直で規則正しい (honest and regular) ことが、彼のような明晰正確な知性の主要な条件であった。自分の天職の範囲内のことならどんなことでも、もし良心に一つの汚点がつくようなことでもあれば、収支の帳尻に誤りがあったり、帳簿のきれいなページにインクの染みがついたときとおなじように、いやそれより深刻に、悩むことだろう(20)。

この D. H. Lawrence の Franklin 攻撃を彷彿とさせる一節から、職業に関わる「誠実さ」(integrity)(20)がせいぜい過失を恐れることと等価となり、評価されてしまう時代への語り手の揶揄が読み取れるはずである⁹⁾。それならば、「おのれの時代と世代の人類に奉仕する」という語り手が父祖から負った倫理は、いかに回復しえるというのか。

「税関の肖像画を並べた私のギャラリー」を通観して気づくことは、三者の描写のなかに、語り手とのダイアログらしきものは一片もさし挟まれてはおらず、それは、彼らの存在様態がそれぞれに語り手の観察眼を楽しませるものではあっても、いわば応答の反撃によって、彼を脅かしたりあるいは内省にみちびくような存在理由を欠いていることの証左であるように思われる。この徹

底した人物観察の視点から展望される税関内の風景は、結局のところ、「私の才能」である想像力が早晩「宙ぶらりんになって、生気を失う」²⁰⁾のような精神の逼塞状況を、まねくことになる。

※

役職着任後1年半あまり経った1847年11月11日付、Hawthorne から友人 Longfellow へ宛てられた手紙の中に次のような一節が見つかる——「私は再びペンを取ろうとしています。ただし、私の立場では習慣的なつきあいもあって、それは余りにも非文学的なものですから、うまくいくかどうかわかりません。一人で坐っている時とか散歩している時はいつも、気がつくと、物語を、たとえば昔の物語を、夢想している私ですが、税関にいる午前中の時間で、午後や晩にやっておいた事がすべてご破算にされてしまうのが実情です。」(L-377) この告白は「税関」の語り手の焦燥感——「もしこんな生活が長く続けば、なるべき値打ちのある人間には変わってゆけないまま、永久にこれまでの自分とは違った存在になってしまうかもしれない。」²¹⁾——と符合しており、状況は、彼が勤務を続ける限り改善の見込みはなかった。経緯はどうであれ結果的には、罷免されることがなかったなら、彼はこうした状況から解放されえなかったはずである。

「税関」を「自伝」よりは「物語」に近いテキストとして読み直す私たちの視座から、とりわけ「税関」後半部において鮮明に見えてくるのは、こうした事実の「不幸な」なりゆきを背景として、前半部で確認されたような語り手の作家としての自己実現へのこだわりが、あえてフィクショナルな自己劇化の儀式を通過することによって説得的に動機づけられ、予定調和的な結末へと回収される再現シナリオにはかならない。それは、今や「胡椒袋やベニノキの籠それから葉巻の箱、ありとあらゆる課税品の梱に関税支払済を証するために刻印され……奇妙な名声の車にのせられて……これまで一度も到達したこともなければ、これからは二度と到達してほしくもない所へ運ばれていって私の存在を宣伝した」²²⁾ホーソンという名を、「本の表題の頁」へと救出奪回しえたことを証すシナリオである。

※

「しかし、過去は死んではいなかった。」²²⁾——「税関」の最もドラマチックな場面の幕開けが、この言葉で始まる。語り手の今や過去のものとなって仮死状態となっている才能が、どのように蘇生の契機を得たのか。

まず準備される舞台は、税関二階の、かつて港の繁栄に見合う規模で設計されながら次代には当初の思惑がはずれて未完のままに放置されている「空中楼阁のような大部屋」(airy hall)②。今は古ぼけた公文書の保管場所となって誰もよりつかないその一角で、語り手は、ある退屈な雨の日に、まるで「ひからびた骨」③のような古文書の山をさぐっているうちに、偶然「昔の黄色くなった羊皮紙に注意深くつまれた小さな包み」を発見する。未完であることによって税関内の異相であることを暗示するこの二階の屋根裏部屋は、日常の業務がとりおこなわれている一階の——例の「不可解なものを、指のひと触れて、白日のごとき明快なものに変えてしまう」有能な実務家の官吏が統括している——現実世界に対して、非日常的な特権領域、換言すれば「過去が反響するための虚構化されたエコー・ルーム」¹⁰⁾として、緋文字発見を演出する隠喩の空間ともなっている。「宝物がでてくるかもしれない」と直感させるその包みのなかで、古文書にまじって語り手の「注意を最も引いた物」④は、かろうじて大文字のAとわかる金糸の刺繍の跡が残ったひどくすりきれ色褪せた赤地の布切れである。

私の目はその古い緋文字に釘づけになり、どうしても目をそらすことができなかった。確かにそれには、おおいに謎を解くに値する何か深い意味があって、その意味が、いわば、その神秘的な象徴から流れだしてきて、微妙に私の感受性に訴え、それでいて私の知性の分析からは逃れていってしまうのだ。……私は、ふとそれを自分の胸に当ててみた。すると——読者は笑うかもしれないが、嘘ではないのだ——まったく肉体的とはいえないが、ほとんど肉体的といってもいい、焼かれるような熱さを感じたような気がした。まるで、その文字が赤い布ではなく、赤熱の鉄でできているかのように。私は身震いして、それを床に落としてしまった⑤。

こうして発見というよりはむしろ憑依にちかいセンセーションをともなって、「緋文字」は語り手の想像力のなかに受胎される。しかしこのプライベートな受胎劇から、『緋文字』の創作が十全に保証されるはずもなく、語り手がこの“conception”（受胎／着想）から“author”（生みの親／著作者）となりうるためには、おそらく彼にとってはより重大な自己劇化がくぐられねばならない。

じつは包みのなかでいちばん最初に語り手の目にふれていたのは、およそ100年前当地がマサチューセッツ湾植民地であった時代、ジョナサン・ピュー（Jonathan Pue）なる人物のセイラム税関への任官辞令であった。この人物は確かに、Hawthorne が歴史取材のために愛読し、語り手も言及している Joseph P. Felt の『セイラム年史』（*Annals of Salem from its First Settlement, 1827*）にその実在・在職が確認できるが、歴史的な事実との符合はそれだけであって、包みの中身が彼に属するものであったことはもとより包みの存在自体がフィクションである。そして、語り手が「（検査官ピュー氏の手になる文書は、緋文字とともに）今は私が所有しており、物語に興味を引かれて実物を見たいという人には誰でも自由におみせしましょう」(26)などと読者に訴えかけるのも、フィクションによって物語の起源に歴史的な信憑性を与えるという文学的な慣習にならったポーズといえよう。しかし、それならば何故語り手はわざわざ、税関二階のあの人気のない屋根裏部屋でピュー氏の亡霊に訪れられ、「その緋の象徴とそれを説明する原稿の巻き物」を手渡されるというゴシックまがいの自己劇化を仕組む必要があったのか。

それ自身の亡霊の声で、彼——自分自身を私の職務上の祖先（my official ancestor）とみなしたとしても理不尽ではあるまいが——は、私の子孫としての彼に対する義務と敬意（my filial duty and reverence）とを尊くも配慮してください、彼の黴臭い蛾に喰われた労作を公にするよう、私に熱心に説いたのだった。「これをなせ」と検査官ピュー氏の亡霊が、その忘れがたい蠶のなかにおさまってまことに堂々とみえる頭を力をこめてうなづかせながら言った、「これをなすのだ。さすれば、利益はすべておまえのものとしてやろう。おまえはもうすぐ、それが必要となるはずだ。なぜなら人間の官職が終身のものでありしばしば世襲でもあった私の時代と、おまえの時代はちがうのだから。しかしよいか、この老プリン夫人の件においては、おまえの前任者たる私の記憶を信頼するがよい。それは当然与えられてしかるべき信頼なのだから。」そして私は、検査官ピュー氏の亡霊にむかってこう言ったのである——「かしこまりました！」(26)

私たちは既に「税関」前半部で、一見これとよく似た場面、そう、語り手と先祖の亡霊たちとの対面の場に立ち合っている。ちょうどテキスト全体からみれば

ば、先の場面に対してシンメトリカルに拮抗するような配置に割りふられたこの場面は、形式的な反復から差異をきわださせつつ、語り手のなかにあらたな決意を顕在化させるのだ。思い出してみよう、先の場面で祖先の亡霊たちは、語り手の物語作家としての存在が彼ら血縁の系譜に連なることを潔しとはしなかった。それに対して、ここでピュー氏の亡霊は、語り手に自らを祖先とし彼を末裔として認知する新しい系譜と權威とを授けている。その新しい系譜とは何か。ピュー氏と語り手とが同じセイレム税関の前・後任者であること——しかしそれは形式的に確認できる「事実」、つまり、亡霊が彼を訪れる前提ではあっても動機ではない。そこで問題にしなければならないのは、ピュー氏が語り手に委譲した仕事「彼の微臭い蛾に喰われた労作」の性格である。そもそも語り手によれば、彼が残した古文書は「公的なものではなく、私的な性質のもの」⁽⁴⁾であった。今と違って税関執務の「ありあまった余暇を地元の古物研究に費やせる」時代であったから、彼は公務をはなれて、さもなければ「すっかり錆びついてしまったであろう精神」をそうした活動で健全に維持していたものらしい。したがって亡霊から手渡された古文書「ヘスター・プリンなる女性の生涯と言動」⁽⁵⁾とは、公職の産物ではなく、公職の受難によく耐えた精神の産物といえるだろう。P. J. Eakin の指摘を援用すれば、「検査官ピューを造形することで、ホーソンは自分自身のために税関の意気沮喪させる環境を生きぬいた先例的な人物像を準備したのであり」⁽¹⁾、この公職の受難者の系譜においてこそ、亡霊は作家たらんとする語り手を訪れその精神を委譲すべく彼に仕事を託したのだといえるだろう。思い出してみよう、先の場面では、ダイアログという普段着の対話形式をかりて父祖の亡霊たちに痛罵をゆるし、語り手自身はそれに反論しえなかった。それに対して儀式的な威厳をまとったここでの亡霊と語り手の言葉の交換は、語り手の物語作家としての存在証明を立てなおすスピーチ・アクトの実践にほかならない。

論点に誤解を招かないように付言するなら、先の場面はこの場面によって転覆されているのではなく、継承され超越されているのだ。なぜなら「ピュー氏の記憶」とは、「ヘスター・プリンなる女性の人生と言動」に関する彼と同時代の人々の記憶や証言で構成されたものである以上、文化の記憶とよびうるものであって、それを再生し公にせんとする語り手の責務と自覚は、たとえ物語という企てによってではあっても、畢竟、先の場面で清教徒の父祖たちが唱えた倫理規範の継承を暗示しているとみることもできるからである。この点に

関して、Donald Pease が、文化的コンテクストからアメリカン・ルネサンスを再読した近著『幻影の契約』で提出している洞察を傍証としたい。

検査官ビューとの対面によって、ホーソンは、書くことと祖先の唱える正しい公的な義務とを区別させえないような文化の記憶 (cultural memory) を永続化する手段をみいだしている。さらに彼は、その時自分自身も、(検査官ビューの)文化の系譜——ホーソンの時代が単に忘却しているだけで、まだそれに強力な排除の力をかけてはいない——のなかに属していることに気づいている¹²⁾。

※

儀式は完了し、語り手はビュー氏の精神的な後継者たらんと決意する。だがそれは、語り手の受難の克服を意味するわけではない。彼は、想像力の中に緋文字を受胎したまま、ビュー氏の時代ほど恵まれていない税関の日常へと再び戻っていかねばならない。それにしても、この「父と息子」の風采の落差たるや、語り手を取じいらせるばかりの時代の隔たりをうつしだしている——「父」は、国王陛下の辞令を負った者にふさわしく「玉座のあたりにただよう、まぶしいばかりの光輝の一条を身に帯びた人間の威厳」¹³⁾を発し、「息子」は国民の従僕として、おのが主人の最も取るに足らない者たちよりもつまらなくて最も下劣なものよりも下劣だと感じている共和国の役人に似つかわしい、卑屈な顔つき」をとりつくろえない。この「卑屈な顔つき」こそ語り手の受難からの救われがたさを物語るものであって、それは、畢竟、ビュー氏に二心のない忠誠を尽くすことを許さない強大な叔父アンクル・サム (合衆国政府) が、彼の主人であることに起因する。

公職が人格に及ぼす影響の一つは、……共和国の強力な腕によりかかっているうちに、その人間の固有の力が本人からぬけ出ていってしまうことである。アンクル・サムの金は、——かの立派な老紳士に無礼な言動を弄するつもりはないが、……悪魔の報酬 (Devil's wages) のごとき魔力もっている。それに手を触れる者は誰でも、自分自身に気をつけなければならない。さもないと、魂そのものとは言わないが、そのより良い属性を巻き込んでひどく不利な取引 (bargain) をしてしまったと気づくことになるからである¹⁴⁾。

語り手は、「ヘスター・プリンの物語」(26)に思いをめぐらしながら、彼自身もまたこうした病理の例外ではないことに気づかざるをえない。彼の想像力は、せいぜい「くもった鏡」(27)でしかなく、そこに生き生きとうつついだされることがかなわぬ登場人物たちは、「死体さながら硬直しきって、ぞっとするような冷笑を浮かべながら、」彼をなじってこう嘲笑する。

「おまえは私たちと何の関係があるというんだ？……おまえはかつて、虚構の者たちにいささか力をふるうことができたかもしれないが、もうそんなものはなくなってしまった。なにしろすずめの涙ほどの公金とそいつを取り引き (barter) しまったんだから。それならさっさと、賃金を稼ぎにゆくがいい。」

ピュー氏との約束が、Pease が “visionary compact” なる概念を適用するような、公的な義務に関わる「契約」であったとするなら、アングル・サムとの雇用契約の内実とは、公務すら賃金という市場価値に還元しついでにはそれに就く者をして「人類の連帯した努力に参加していない」(30) ような利己主義者に墮落させる「取引」にすぎない。そもそも税関なるものは、権力による市場操作の表徴、「コマーシャル・デモクラシーの化身」⁽³¹⁾ではないか。そして二人の「父」に忠節を尽くしえない語り手の困難には、ある観念史の皮肉な反転がみえてこないだろうか。マックス・ウェバーを引くまでもなく、もともと「契約」とはピューリタニズムの超俗的な使命感を支える思想であった。それが世俗内的な職業倫理へと読み変えられて、ついに私的な営利の追求すなわち「取引」を合法化していく歴史を私たちは知っている。語り手の困難は、今や「取引」が「契約」をほとんど圧殺しかけているアメリカ19世紀という時代の困難であったというべきであるかもしれない。

「この惨めな精神の麻痺状態が私にとりついていたのは、私の一日のうちアングル・サムが取り分として要求していた3時間半の間だけではなかった。海岸の散歩、田園の散策……書斎」(27)、そして、月光の冷性と炭火の鈍い暖性が混じりあって霊化された「居間」——「想像的なものと現実的なものが出あって、相互に浸透しあう中間地帯」(28)、すなわち語り手によれば想像力が「ロマンス」を創出しうる理想的な情景、すらが侵される。彼は今や、「憂鬱症になって落着きがなくなり……（あの食道薬の検査官のように動物になってしまわ

ぬうちに) この税関から人間として出ていくためにはあとのくらいここいても大丈夫かなどと計算する」³¹⁾ ようになっている。

先に本論冒頭で概略を辿っておいたように、大統領の交代に伴う検査官職罷免という事態は、職場の実体がどうであれ、Hawthorne にとって不本意な追放であった。不穏な兆しがみえはじめた頃からできうるかぎりの保身の努力をおこない、それが徒勞であることがほぼ確定的となった1949年6月5日には、次のようにその憤然たる思いを友人 Longfellow に打ち明けている——「政治屋の猟犬どもに迫いたてられている自分に気づくと、私の内にちょっとした悪魔が頭をもたげます。……もし私の追放に奴らが成功したら、私は多分ひとり犠牲者を選びだしてそいつの心臓に毒を一滴たらしてやり、大勢ににやにや笑われながら長い間苦しさに身悶えさせてやろうと思っています。」(L-269) しかし一方「税関」の語り手は、この「大変に深刻な偶発事」³¹⁾ を、事態好転のための「天の配剤」³²⁾ と読み変える。

以前から公職に嫌気がさしていたこと、漠然と辞職することを考えてもおり、私の運命は、自殺願望を抱いてもおかしくない状況にあって、まったく思いもかけず殺害されてしまうという好運にめぐりあった人間のそれに似ていなくもなかった³²⁾。

こうした黒いユーモアを発散する殺人の修辞は、「政治的ギロチン」³³⁾ による斬首刑の隠喩へと転移し、「税関」のエピローグにいたると「首を落とされた検査官」(Decapitated Surveyor) というイメージとなって氾濫する。この自己言及が発効させる言表効果とは、いかなるものか⁴⁴⁾。それを問直すことが、「税関」を「物語」として読む私たちの再読作業の意義の、最終的な確認につながるはずである。

当然のことながらすべからく自伝というものは、伝記とはちがって、主人公の死をもってその語りを停止させることはできない。Scholes と Kellogg の理論化によれば、したがって、そのプロットを死以外の審美的に満足しうる結末で終わらせるためには、何か別に語りを解除する形態がみいだされねばならないが、実際自伝の多くは、そうした結末を實踐してはおらず、語りは先に引き継がれるべきものとして終わっている。しかし、「自伝であっても、それが著者の内的人生の物語となっている度合によっては、その自然の終結点には彼の

死ではなく、彼が自己自身と折り合いをつけたり、その本性を自覚したり、天職に就いたりするような時点がえらばれている。]⁶¹ 「税関」の語り手が、「税関」と『緋文字』そして当初作品集として一緒に出版することを考えていた他の小品を含めて、それら全体をみずから、「首を落とされた検査官の遺稿集」(the “Posthumous Papers of a Decapitated Surveyor”) と命名するとき、その隠喩は、「税関」という物語に死が再生であるような結末を与えるスピーチ・アクトを演じるのだ。なぜなら、もはや贅言をつくすまでもなく、検査官の死とは、アングル・サムとの「取引」の解消であり、裏返せば、ピュー氏との「契約」の履行に励むべき作家としての再生であるはずだから。そして、最近セント・ピーター教会の墓地から発掘された遺骸にその頭蓋骨がよく残されてはいなかったというピュー氏のように、首を失った (headless) われらの語り手もまた、その頭脳の活動の痕跡というべき「遺稿」によって、文化の記憶に参入しえたのである。

注

- 1) 1849年3月5日付、ホイッグ党の友人 George Hillard 宛の手紙からの引用。Arlin Turner, *Nathaniel Hawthorne: A Biography* (New York: Oxford U. P., 1980), p. 179.
- 2) *Ibid.*, p. 180. 6月21日付 Sophia の手紙からの引用。
- 3) *Ibid.*, p. 204 および James R. Mellow, *Nathaniel Hawthorne in His Times* (Boston: Houghton Mifflin, 1980), p. 313 参照。
- 4) *Ibid.*, p. 165. 長女 Una 誕生後の1844年3月24日付、George Hillard 宛の手紙からの引用。
- 5) Nathaniel Hawthorne, *The Letters, 1843-1854*, vol. xv of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. Thomas Woodson et al. (Columbus: Ohio State U. P., 1985), No. 338. 以下本書から直接手紙を引用する場合は、() 内にL-番号で示す。
- 6) Nathaniel Hawthorne, “The Custom House,” in *The Scarlet Letter*, (New York: Norton, 1988), p. 6. 以下「税関」の引用はすべて同版により、() 内に頁を示す。なお、頁が直前の引用と同じ場合は、これを省く。
- 7) David Stouck, “Surveyor of ‘The Custom House’: A Narrator for *The Scarlet Letter*,” *The Centennial Review* 15 (1971), rpt. in *The Scarlet Letter* (Norton), p. 256.
- 8) Eric J. Sandquist, *Home as Found: Authority and Genealogy in Nineteenth-Century American Literature* (Baltimore: The Johns Hopkins U. P., 1974), pp. xii-xiii.
- 9) D.H. Lawrence, “Benjamin Franklin,” in *Studies in Classic American Literature* (1923) 参照。

- 10) A. Robert Lee, "'Like a Dream Behind Me': Hawthorne's 'The Custom House' and *The Scarlet Letter*" in *Nathaniel Hawthorne: New Critical Essays*, ed. A. Robert Lee (London: Vison, 1982), p. 59.
- 11) Paul J. Eakin, "Hawthorne's Imagination and the Structure of 'The Custom House,'" *American Literature*, XLIII, (Nov., 1971), p. 335.
- 12) Donald E. Pease, *Visionary Compact: American Renaissance Writings in Cultural Context* (Madison: The Univ. of Wisconsin Press, 1987), p. 67.
- 13) Nina Baym, "Romantic *Malgré Lui*: Hawthorne in 'The Custom House,'" *ESQ*, 19 (1973), rpt. in *The Scarlet Letter* (Norton), p. 270.
- 14) ホイッグ党の Taylor 新政権による一連の公職入れ替えは、1949年春から始まり民主党系の新聞はこれをテロ行為であると報じて批判した。実際、5～6月の地元紙ポストン・ポストには、任免の告知とともに、Taylor 将軍が葉巻を吹かしながらギロチンの傍らに立って、その足元にはいつもの首がころがっている風刺絵が何回も掲載されたという。6月12日、前日の同種の記事に対して寄せられた匿名の投書は、挿し絵の犠牲者を Hawthorne に見立てて、彼の罷免に抗議した内容であったが、おそらくこれが Hawthorne にギロチンの隠喩を着想させたきっかけであったろうと推察されている。
Turner, *op. cit.*, p. 181 および Larry J. Laynolds, *European Revolution and the American Renaissance* (New Haven: Yale U. P., 1988), pp. 82-83 参照。
- 15) Robert Scholes and Robert Kellogg, *The Nature of Narrative* (New York: Oxford U. P., 1966), pp. 214-215.